教育ひょうご

発行所 神戸市中央区中山手通4丁目10－8
兵庫県教職員組合
発行人 兵庫県教職員組合 代表者 森戸卓也
編集人 福山香織
電話 050（3538）2346
1部15円 年定価360円
（組合員の購読料は組合費の中に含む）

2025/1・1
No.2108

新年号

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

年頭に際し、組合員・ご家族の皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

日頃のご支援に感謝申し上げます。今後も仲間とともに懸命の努力を続けてまいります。
変わらぬご厚情をお願いいたします。

兵政連 一同

あけましておめでとうございます

やのこうじ 神戸市会議員【東灘区】
おきしお守彦 太子町長
小西ひろのり 兵庫県議会議員【西宮市】
みずおか俊一 参議院議員
山崎たけし 三田市議会議員
北野さと子 宝塚市議会議員
岸田まさと 伊丹市議会議員
おくの尚美 西宮市議会議員
土井たくみ 南あわじ市議会議員
三木浩一 たつの市議会議員
古田ひろあき 三木市議会議員
竹内きよ子 明石市議会議員

未知なる道を切り拓く

兵庫県教職員組合 中央執行委員長 森戸卓也

間もなく阪神・淡路大震災から30年を迎えます。

震災当時、それぞれの学校園で中心となっていた教職員が次々と退職を迎え、当時子どもだった世代の教職員が現場の中核を担っています。震災以降に生まれた教職員も増え、震災が風化しつつあるのではないかとの懸念もあります。また近年、地震や豪雨による災害が頻発・激甚化しており、さらに近い将来、南海トラフ地震の発生も確実視されています。改めて原点に立ち返り、予測困難な時代を生き抜くために、「次世代へ語り継いでいくこと」、「1．17を忘れない、風化させないこと」、これは兵庫に生きる私たちの責務であり、今後も教育研究活動をはじめ、さまざまな機会を通して教訓を語り継ぐとりくみをすすめます。

私たち兵教組は、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念をふまえ、いつの時代にあっても子どもたちが夢や希望を持って成長できるよう寄り添い、未知なる道を切り拓く「生きる力」を育む教育を推進してまいります。

今年7月、参議院議員選挙がおこなわれます。兵教組は比例代表候補予定者・みずおか俊一さんを推薦決定しています。

私たちは、子どもの権利条約の理念にもとづき、「生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利」を子ども一人ひとりに照らし合わせ、すべての子どもが安心して学べるインクルーシブな学校園、条約の理念が生かされる社会の実現をめざしていかなければなりません。そのためにも、学校園現場の実情をよく知る兵教組出身のみずおか俊一さんが国政の場に必要です。とりくむ意義を再確認し、支援の輪を広げてまいりましょう。

さまざまな職種の組合員で組織される兵教組は、子ども・仲間の想いに寄り添い、より一層現場に依拠した運動をすすめていく必要があります。「使命」と「誇り」を持つ兵庫の教職員集団としてあり続けるために、引き続き、県内29地域組合が力を合わせ、「参加・提言・改革」の運動をすすめてまいります。

今年も、どうぞよろしくお願いいたします。

兵庫県教職員組合の皆様、あけましておめでとうございます。

日本教職員組合 中央執行委員長 梶原 貴

「能登半島地震」発生から1年が経過しました。また、今年は阪神淡路大震災から30年の節目の年です。過去の震災における経験をいかし、引き続き全国連帯で復旧・復興にとりくんでまいります。

今年、第二次世界大戦終結から80年を迎えます。そのような中、24年ノーベル平和賞に日本被団協が選ばれたことは大きな喜びです。ノーベル委員会は、日教組が支援する「高校生平和大使」の活動にも大きな期待を表明しています。日教組としても平和のとりくみを強化してまいります。

一方、23年度の不登校の子どもの数は過去最多で、いじめの認知件数や暴力行為、児童虐待も増加し、子どものいのち・人権に関わる深刻な状態が続いています。子どもの権利条約やこども基本法にもとづいた、子どもの最善の利益が保障されるインクルーシブな学校・社会を実現していきましょう。

学校の働き方改革・教職員不足解消は引き続き最重要事項です。昨年8月の中教審答申の実現を求めるとともに、従来通り、業務削減、人員増、給特法の廃止・抜本的見直しの実現にとりくんでまいります。

先の衆議院選挙において、自公政権を過半数割れに追い込むことができました。日教組がもとめる社会の実現にむけ、夏の第27回参議院選挙における、みずおか俊一さんの支持につなげていかなければなりません。全国連帯のもと一丸となってすすんでいきましょう。

しっかり議論する国会へ！

日政連国会議員団会長 参議院議員 水岡 俊一

あけましておめでとうございます。日々子どもたちのためご奮闘される教職員のみなさんに、心より敬意を表します。

長年、大きな問題であった「給特法」に動きがありそうです。「在校等時間」の名のもと、違法な時間外勤務を押し付けられる学校現場の働き方改革は極めて重要です。「義務標準法」の改善も一体で進めることが不可欠と考えます。

昨年の総選挙では、日政連衆議院議員4人全員の当選をはじめ、野党勢力が躍進し、与党が過半数割れとなりました。

これにより、30年ぶりに衆議院の予算委員長ポストに野党議員が就くなど、国会には大きな変化が起きています。雰囲気はこれまでと大きく異なってきました。しっかり議論する国会になるよう、とりくんでまいります。

今年も全国の日政連自治体議員と協力しながら、現場の声をしっかりと政府に届けていきます。引き続き、みなさんの声を日政連議員にお寄せください。

子どもたちの笑顔のため、教職員の働きやすい環境づくりのため、仲間とともにがんばってまいります。

子どもたちの笑顔溢れる学校をめざして

参議院議員 古賀 ちかげ

兵教組の皆さん、あけましておめでとうございます。いつもご支援いただきありがとうございます。

昨年は、日本被団協の皆様のノーベル平和賞の受賞がありました。しかし、国は「核抑止論」を叫び、「核兵器禁止条約」に署名も批准もしていません。世界で唯一の被爆国として「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ」を改めて胸に刻み、核のない世界にむけてとりくんでまいります。

今年の通常国会では、「給特法の見直し」がなされます。しかし、今の案は業務削減、定数改善、カリキュラムの見直し等には具体的には、ふれられておりません。調整額や手当増だけではなく、本当の意味での「働き方改革」となるよう、日政連議員で連携しながら、国会で論議してまいります。

今国会、私は総務委員会の所属となりました。これからは、「会計年度任用職員制度」、「公務員制度改革」等に関わり、皆さんの働きやすい環境、処遇改善に向けてとりくんでいく所存です。

子どもたちが安心して学べる、遊べる、居場所のある学校をめざして、そして子どもたちを温かく見守ることができる教職員の働き方をめざして、今年も尽力します。ともに頑張りましょう。

みずおか俊一さん コラム

「しっかり議論する国会へ！」

衆議院選挙後、本格的な国会論戦の場である臨時国会が始まりました。選挙結果によって与党が過半数割れをしている国会では、何事も与党だけではすすめることができません。そうした状況の中、石破総理が何の政策課題にどのようにとりくむのかを聞く「所信表明演説」は、誰もが注目するところでした。

その演説の中身はどうだったのか。外交安保、地方創生、治安防災の3つの重要政策課題が全体の約7割を占めていました。教育についてはどうだったのか・・・教育に関する項目はなく、文字にしてわずか51文字で全体の1％にも満たないものでした。残念でなりませんが、これが石破政権の実態です。

さて、今年の流行語年間大賞は「ふてほど」でした。自民党の「政治とカネ」問題は、裏金や巨額の政策活動費など不信感を増大させるばかりでした。総選挙における与党の過半数割れは、有権者が「不適切にもほどがある」と判断された結果だと思います。

お正月ファミリーパズル まちがい探し

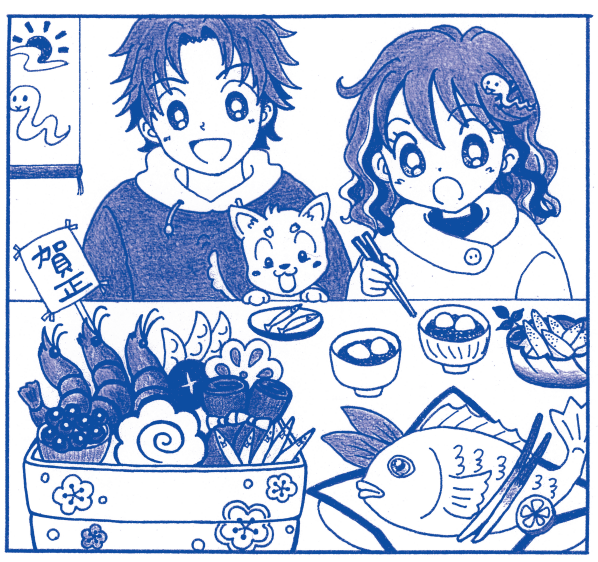
パズル制作：ひろ みよこ

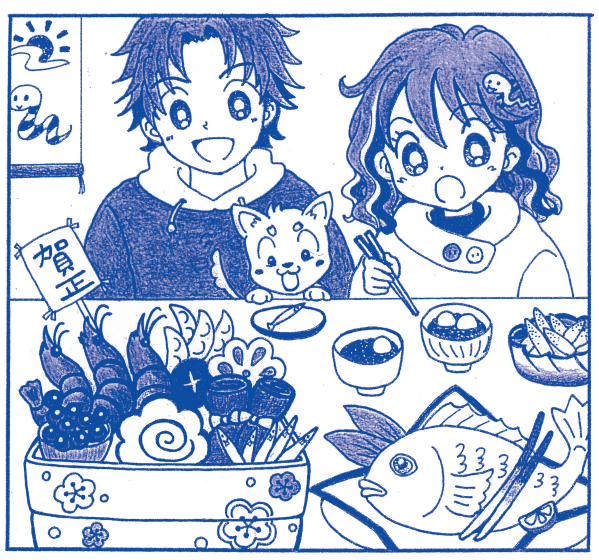
右と左の絵をよく見くらべると、違っているところが10ヵ所あります。

どちらかの絵に10ヵ所赤丸を入れ、切り取ってはがきに貼って送ってください。お名前、年齢、地域組合名、住所（郵便番号も）を明記の上、ご応募ください。また、本紙の感想などもお寄せください。20人の方に図書カードを差し上げます。

締め切り：1月31日（消印有効）

あて先：〒650-0004　神戸市中央区中山手通4-10-8ラッセホール4F「教育ひょうご編集部」





オンデマンド配信のお知らせ

教育シンポジウムが
組合員専用ページより視聴できます

視聴は二次元コードまたは下記リンクをクリック
※ IDとパスワードは各所属地域組合にお問い合わせください
https://hyokyoso.net/etc/edu_cul_lab/research/index.html

第74次兵庫県教育研究集会 教育シンポジウム

「子どもと災害にどうむき合うか」～もし2030年に巨大地震が起きたら～

11月10日（日）
神戸市立西区文化センター
（なでしこホール）

コーディネーター　大森　直樹（防災教育部会協力研究所員・東京学芸大学）
シンポジスト　永田　守（元教員・芦屋）
三村　理加（EARTH員、養護教員・姫路）
白石　草（ビデオジャーナリスト）

永田　守さん

私は30年間、小学校現場で震災を忘れないとりくみをおこなってきた。芦屋市では、阪神・淡路大震災によって444人の尊い命が奪われ、大きな被害を受けた。当時は災害による環境の変化で、生活基盤が崩れ脆弱な立場の中で生きざるを得ない子どもや保護者、また育児不安を抱える保護者がたくさんいた。学校生活の場でいかに支えつつ、教育復興をしていくのかということが大きな課題であった。

2000年、精道小に入学してきた一郎（仮名）は、震災以来笑わなくなり、時には手のつけられない癇癪も起こした。学校での不安定な一郎の様子を毎日保護者に伝え、保護者の悩みに寄り添った。信頼感とともに、保護者の心の安定が何よりも大切だと考えていたからであった。6年生の理科で、地震のメカニズムの授業をおこない、地震は地球のプレートのダイナミズムが原因で起こること等を丁寧に説明した。授業後、これまで地震という得体の知れない魔物とたたかっていたが、魔物の正体があきらかになり、一郎は安心した様子であった。地震のメカニズムを知る、防災の知識を正しく学ぶことは、子どもたちの心の災害を防ぐ大きな力をもち、安心感につながる。

2011年に転勤した打出浜小（以下、打小）は、「打出の森」と「打小の水辺」という2つの震災遺構がある。「打出の森」は、震災復興を記念し中島祥子さんを追悼するトチの木や、数種類の木が植えられている。「打小の水辺」は、震災で傷ついた子どもたちの心を少しでも和らげようと、職員室前につくられた人工池である。しかし、時間の経過にともない「打小の水辺」は手入れが行き届いておらず、水辺ができた経緯や、当時の打小の先輩たちの願いが教職員に充分に語り継がれていなかった。

2019年、水辺の復活プロジェクトがスタートした。大型ポンプで水を抜き、溜まっていた泥やヘドロをかきだしていると、通りがかった子どもが興味津々で自然発生的に嬉々として手伝うようになった。

この出来事をきっかけに、多くの子どもが震災の事実や「打小の水辺」に興味をもち、そこに込められた願いを考える中で、温かいエネルギーを感じ取ってほしいと願い、道徳の自主教材「打小復活プロジェクト」をつくった。

ベテランの教職員から、芦屋での「震災を忘れないとりくみ」は、「教職員が被災した子どもたちと一緒に生きることの意味を見出そうとして始まり、兵庫で防災教育の充実とともに、つらい震災の事実と真正面からむき合い、人間としての生き方、あり方を考え続ける教育活動を創造してきた」と教わった。私はそのバトンを引き継ぎ、次の世代に渡す役割をしてきた。

2023年1月17日、研究者の平山朋子さんは打小の子どもたちに「将来皆さんは必ず被災者と出会うことになる。一緒に生きていくことになる。震災を忘れないとりくみを学び、つないできた皆さんは被災者が生きていこうとする希望になる」と語った。

震災を忘れないとりくみのもつ意味が、今を生きる子どもたちにとっても、そして私たち教職員にとってもますます大きな意味に広がっていることを実感している。

白石　草さん

東日本大震災では地震、津波、そして原発災害が続けて起こった。福島県から200km離れた東京都も放射性ヨウ素が飛散してきた。そのような中でも、公立学校では普通に授業がおこなわれたが、私立学校には多くの子どもが九州や海外に避難した学校もあったと聞いている。

これまで一般公衆の被曝の上限は、年間1mSv（ミリシーベルト）とされてきたが、文科省は原発事故後、20倍の20mSvまでであれば、通常通りの学校教育をおこなってもよいという通知を出した。教職員や保護者が通知撤回をもとめ、文科省前で大きな要請をおこなった。この時学校や家庭で起きたことや、混乱の中で子どもが何を感じ、苦しい思いをしていたかについて、当時15歳だった福島県内の女の子が書いた本『わかな十五歳　中学生の瞳に映った3・11』（ミツイパブリッシング）がある。ぜひ読んでいただきたい。

東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内にある、南相馬市小高区唯一の中学校である小高中学校を2013年から10年以上取材している。震災直後、多くの地域で避難指示が出され学校は休校し、その後別の地域で授業をすることになった。3月下旬、教育委員会から教職員に対して学校再開の連絡があり、教職員は防護服を着て避難指示が出ている学校に戻り、教材を運び再開の準備をした。どこに子どもが避難しているかわからないので、一人ひとり、人づてに探し回ったという。事故前の生徒数は382人だったが、4月に学校再開した時は10数人しかおらず、また別の中学校の教室を借りていたため大変なトラブル続きだった。徐々に生徒は戻り90人程度まで増えたものの、8月に延期されていた人事異動や兼務発令が重なり、多くの教職員が学校から去ることとなった。県教委は、避難で生徒数が減った学校の教職員に対して兼務発令をおこない、多くの教職員が避難先に移ることになってしまった。

その結果、子どもは大人に見捨てられたという思いを抱え、非常に不安定になった。この状況を見た当時の遠藤校長は教育委員会に掛け合い、3年間一切の人事異動をストップさせた。そんな厳しい状況の中、この学校で生まれた「群青」という曲は、音楽の小田美樹先生が当時1年生だった生徒の卒業式にむけて作曲したものである。子どもの言葉を書き留め、それを歌詞にした曲で、離れ離れになったり、亡くなってしまったりした友だち、一緒に過ごしてきた仲間への想いを歌っている。

現在、福島県内でもほとんどの地域で避難指示が解除されたが、震災前に比べて子どもの数は大幅に減っている。小高中学校も地域の子どもが減り、教育環境も昔とは大きく変化している。そんな中でも「群青」は歌い継がれていて、今年は子どもと一緒に、「群青」がどのように生まれたのかインタビューをするワークショップをおこない、作曲した小田先生から話を聞く機会を設けた。子どもは、自分たちが生まれた頃に起きた地震を受け止めていた。

小高中学校では、仮設校舎が取り壊しになる前の2016年、VRの技術を使って校舎全体を撮影した、バーチャル校舎をネット上にアップしているのでぜひ見てほしい。また、子どもと一緒に「仮設校舎ありがとう」という動画をつくった。

小田先生をインタビューするワークショップに参加した子どもがつい最近、この「仮設校舎ありがとう」ビデオに刺激を受け、この作品のオマージュ的な動画を作り、文化祭で上映したのを見て感激した。自分たちが主体となり、自分たちのことを記録する動画をつくってくれたことがとても嬉しい。

小高中学校についての動画が、左記の二次元コードより視聴できます。

「6年目の小高中学校～群青を歌い継ぐ～」
「小高中学校360度バーチャルツアー」
「仮設校舎ありがとう」

三村　理加さん

もし2030年に巨大災害がおこると、被災地の学校は避難所になり学校教育の機能に大きな影響がおよぶ。そこで2024年1月1日に発生した能登半島地震にEARTH先遣隊として携わった支援活動を振り返り、学校の役割や教職員が担う心のケアについて考えていく。

先遣隊の任務は、石川県珠洲市の学校の被災状況を視察し、支援人数の聞き取りと今後の派遣規模の見立てをおこなうことであった。EARTHの主な支援内容は、避難所運営、学校再開や応急教育の支援、心のケアに関すること、学校の環境整備など学校の教育復興につながるものすべてにわたる。

発災10日め、避難所となっている小学校は、教職員が不眠不休で避難所と子どもたちの動線をわけ、子ども専用の教室やトイレの確保等、学校再開の準備をすすめていた。学校再開に必要な物資は、避難所の対策本部と管理職が交渉して確保した。1月11日に学校再開をしたところは、教職員が登校している子ども一人ひとりに声をかけていた。「本当はまだ怖い。津波が怖い」といった子どものつぶやきに、学校では背負いきれないほど、さまざまな思いをもって来ている子どもたちがいることを痛感した。中学校に間借りをしている小学校は、普段の教室をイメージしやすくするために音楽や授業方法で日常を取り戻すとりくみをおこない、ある中学校は安全・安心な学校生活のため、心のケアの視点を入れた津波避難訓練を実施するなど、どの学校でも子どもたちに丁寧に寄り添った学校再開をおこなっていた。心のサポート授業の支援では、自分の体や心の調子をチェックできるストレスチェックシートを現地の養護教員の方と一緒に作成した。学校は子どもたちの思いを表現し共有する場であり、学校再開は心の回復の役割を担っている。

そんな子どもたちを支える教職員も被災しており、隣の校区の小学校に避難している方、勤務校の避難所で生活している方、または出勤できない方、生活を含め心身ともに極めて過酷な状況にあった。中学校の教頭先生が差し入れのゆで卵を一緒に食べている時、災害時に津波から逃れた話を泣きながら語られた。EARTH員は、教職員のさまざまなつぶやきに寄り添った支援をおこなった。また今年7月に、教職員や保護者の方々と一緒に語り合い、わかち合う場に携わったと報告があった。

『EARTHハンドブック』には、阪神・淡路大震災における心の健康について、教育的配慮を必要とする子どもが減少するには数年を要するとされており、長期的な継続支援が必要であること、震災にむき合い、語り合い、わかち合うことがストレス反応の軽減に重要であることが示されている。

最後に、文科省が災害時の学校支援組織「D-EST」を構築すると発表した。また珠洲市の各学校のHPで、被災からの学校のあゆみを知ることができる。被災地に関心を寄せることから学ぶことはとても多い。災害が起こってからではなく、日常の生活の中でこれまでの教訓を生かした防災教育と心のケアのとりくみが必要だと強く思っている。

大森　直樹さん

兵庫県では、被災から30年にわたって防災教育の教育実践がおこなわれている。私はこの実践記録の積み重ねに助けられ、子どもと災害にどうむき合うかを教わってきた。

3人のシンポジストの報告から、災害と教育の関係について、これまでのイメージを拡張することがおこなわれたように思う。また、災害後の長期にわたる心のケアへの着目があった。被災後5年、10年で子どもが必要としていることが何なのかが見えてきた。

災害に「備える防災教育」を「狭義の防災教育」と押さえてみると、「広義の防災教育」についてのイメージも拡がっていく。教職員が震災遺構を大切にすると、それを見て今を生きている子どもが安心をすること、自らも災害とむき合うようになることが確認されてきた。これらは兵庫で発見されてきたことだ。

全国教研では兵庫以外からも多くのリポート報告がある。1本のリポートだけではわからなくても、複数を読み重ねることで見えてくることがある。今子どもが歯を食いしばるようにしてどう生きているのか。そこに教職員がどう寄り添っているのか。それらは兵庫で積み重ねてきたことでもある。子どもの生活の事実を一緒に見つめ、子どもから教えてもらい、それに対応するための教育内容をつくり出していくこと。このような教職員のとりくみから学ぶことで、戦後教育において教職員が獲得・確認してきたことを今もう一度捉え直すこともできるのではないかと思う。

本日のシンポジウムを企画していただいた兵庫の教職員の皆さんに感謝申し上げる。

教育シンポジウム（質疑応答）の様子